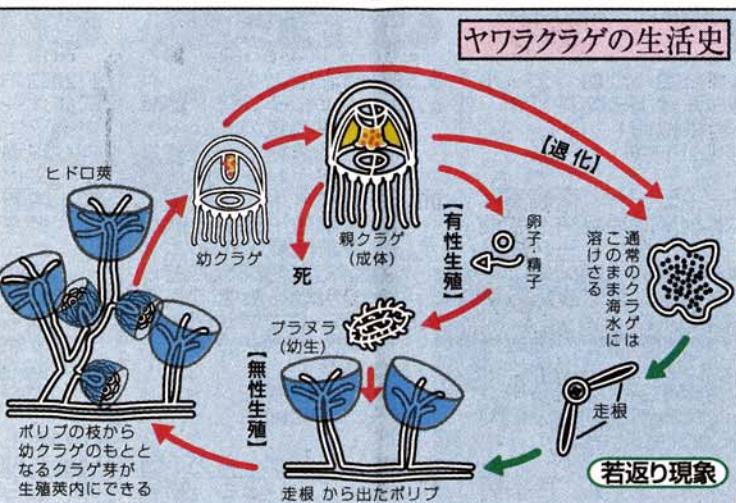
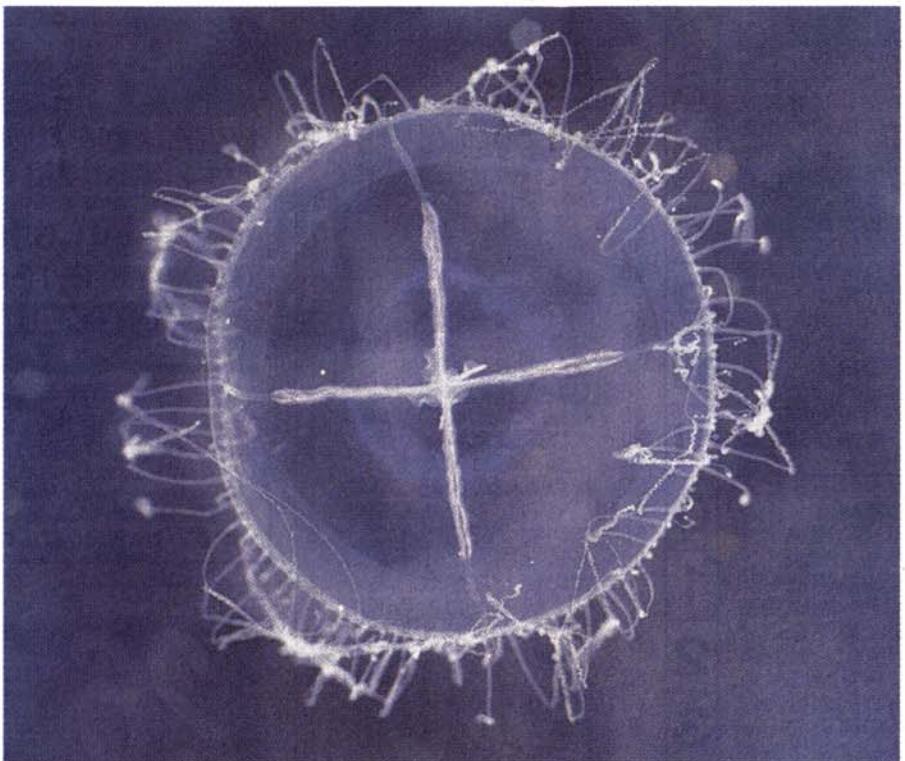


世界で2番目に発見された若返りヒトクロクレゲ類のヤフリクレゲ



た。血縁関係が相当濃いに過ぎない。それでも「若返り」を起す共通のメカニズムに注目し、若返り過程を遺伝子レベルから生態学レベルまで比較研究した結果、完全なる不老不死の妙薬の精製に成功した。

■崩れた環境バランス

19世紀以降の科学の躍進により、夢のように便利で素晴らしい豊穣(ほうじょう)世界が地球上に到来していた。だが、その裏には大きな恐怖が潜んでいた。人類が気づかぬうちに、靈長類はもとより、クジラや魚、大型動物が一斉に同

して、生体を安定した恒常的状態に保とうとする仕組み)にも似たファイドバックができなくなっていた。人類の食べ物は、人工物に置き換わっていた。強力な防腐剤のおかげで、見掛けだけは自然のまま。美味で廉価で長持ちする製品に加工されている。大量生産できるため、どの家庭でも食卓をにぎわせていたが、極微量だが環境ホルモン(内分泌かく乱化学物質)的な毒素を含んでいた。住居では、耐性が半永久という人工建築材料が開発された。だが、この製品からも、気付かない微量の有毒成分が揮発し続けていた。飲料水の中

污染された循環からもたらされたものだった。人類を絶滅へ向かわせたもつとも大きな要因は他にあった。それは、国家ごとに人生觀や生き方の原理そのものが大きくなっていた。生活の基本ルールのどれをとっても、世界各国で統制、統一が取れていなかった。食品に使用する許容薬剂量はもとより、建築人工素材の製造方法、飲料水の精製法、大量に出るごみ処理問題など、どれをとってもみて大きく異なっていた。自然が分解不能な膨大な数々の量産品からしみだす汚染有毒物質を歯止めをかけることはできなか

うして平素の食べ物はもとより、水も空氣も土も、知らない間に人類をむしばんだ。20世紀に2度も突発した世界戦争の後で、格段の進歩を遂げた工業、産業、文化が、生き物すべてを毒生物へと変化させ続けた。実は東洋のある国で、目に見える形の悲劇が20世紀後半に生じていたが、これはその国だけのささいな出来事として片付けられていた。

■すべての人類に『若返り』を

若返りを3度繰り返しながら、X博士は世紀を追つごとに進行する地球の有毒化的現実を目の当たりにしてきた。もはや目に見える悲劇に目をつけた。

大人がひ弱になり、子どもが正常に生まれない時代がきた。「このままでは早晚、人類が絶えてしまう」。これを救つたためには、ヒドロクラゲから得た『若返り』の妙薬を用いるしか手段が残されてなかつた。

今後はある程度丈夫な体をもつた大人たちが、せめて『若返り』を繰り返しながら、生存しつづける新人類へと移行しよう。

限定されてはいるが、他の生き物たちと平和に共存できるユートピア計画への実行にむけて、第1歩を開始しよう。それでもだめなら他の星に移住すればいい。X博士が見上げた空にはぎらぎらと輝く数々の星がある。

クラゲで作つた若返り妙薬

S F 小説 第2弾 回記念

はやく察知していたX博士は『若返り』実験を自己に施し続け、さらにベニクラゲ以外にもヤフランクダゲなど若返るヒドロクラゲ類を次々と発見した

語して狂いはじめる状態に突如なるうとしている。地球的規模で環境のバランスが壊れてしまつたからだ。ホメオスタシス（外界の環境変化に対

にも極微量の有毒物質が
さまざまルートで溶け
込んでおり、毒素が検出
不能なまま毎日のように
体内に取り込まれて続け
ざまざまな時間の経過とともに食
物連鎖の最高位の人類に
は、致死的な影響を及ぼ
つた。

京都大学助教授 久保田 信
（京都大學生实验所）

宝の海から

50



「人間は何のたまに
何をして、どのように生
きていくのか?」「絶
滅してしまったほうが楽
なのではないだろう
か?」「永遠に生きつ
づける体になるのが本当
にベストなのか?」
博士は自問自答を繰り返
した。